

# 田無神社に生まれた新名所 龍神池の役割と価値

特定非営利活動法人 NPO birth  
自然環境保全部 部長 久保田 潤一

抜いてあります。龍神池が作られた経緯、そして役割と価値についてご紹介していきます。

## 池づくりのきっかけ

2018年4月の終わりに、宮司の賀陽智之さんからNPO birthの事務所に電話がありました。「田無用水の跡地に、子どもたちが生きるとふれあえるピオトープを作りたい。相談に乗ってほしい」というものです。ピオトープとは、ギリシア語で命を意味する「bios」と場所を意味する「topos」を合わせた造語で、野生生物の生息空間のことを指します。神社に池があるのを見ることはありませんが、ピオトープを、それも一から作るという話は聞いたことがありません。自然環境の保全を進めるNPO birthにとっては願ってもないお話で、すぐに地元の工務店や造園会社との話し合いの場が持たれることとなりました。こうして、氏子の子どもたちに対する賀陽さんの熱い想いから、池づくりがスタートしました。

## 田無用水の再現

神社という公共性の高い場所に、野生生物が生息し、子どもたちがそれを観察できる空間を創出する。

これだけでも非常に素晴らしいですが、そこにもう1つ重要な視点を加えることになりました。それは田無用水の風景や、そこに存在した生態系を当時の姿で再現しようというものです。

昔、この地域には、「田無用水」という水路が流れていました。江戸時代の中期、1696年頃につくられた水路です。地域の火々はこの水路を流れる水を炊事、洗濯や農作物を作るために利用していました。そしてそこには、小魚やホタルなど様々な生きものが暮らしていました。

しかし、昭和に入り、水道施設の整備が進むと生活用水としての田無用水の役目は終わりました。1964年頃には、コンクリートの蓋で閉ざされ、現在の遊歩道になりました。江戸時代から300年以上続いた水路の流れる風景や小魚やホタルの姿も消えてしまいました。龍神池を作ろうとしている場所は、まさにこの暗渠化された田無用水の真上だったのです。用水の復活は現時点では難しいことです。この場所に水辺を再現することは、その第一歩として大きな意味を持ちます。

## 池づくりの工程

まずは、もともとあった石や樹木を除去して更地にします。そこにバックホウで穴を掘り、池の外形を作ります。そのままでは、水を入れても地中に染み込んでいつてしまうので、水漏れしない丈夫なゴムシートを張ります。その上に良質な土を敷き、周縁部を石や植栽で整えます。また、神社らしい景観の創出と水中への酸素供給のため、池の中に滝を設けることになりました。ざっと書くと簡単そうですが、実際の作業では、そのひとつひとつにこだわりと苦労がありました。

## ピオトープの質を左右する土

龍神池を作るにあたって最もこだわりの、そして苦労したのが池に入れる土の入手です。土は、池の生態系の基盤です。土の中に混ざっている水草の種子が発芽することによって、多くの生物が生息できる環境が作られます。問題は、田無神社からなるべく近く、かつ田無用水と同じ多摩川水系に位置する池や湿地などから土を入手することができるところが少なかった。遠く離れた場所から土を持ち込んでしまっても、田無用水の再現にはなりません。それどころか、別な地域の植物の種子を人の手で持

2018年11月、田無神社に「龍神池」が出来上がりました。この池は、水神様をお祀りすることにも、ある重要な役割を担うために作られました。池を構成する素材や構造は、こだわり

ちだめば、国内外来種を神社に侵入させることになり、生態系の攪乱に繋がってしまいます。様々な公園や河川沿いの湿地などの候補地を検討し、交渉を重ねてようやく入手先が見つかりました。そこは多摩川沿いに位置する農家さんの土地でした。

現地に行ってみて驚いたのは、このお宅の水田にトウキョウダルマガエルが生息していたことです。本種はレッドデータブック東京(2013)で絶滅危惧IB類に選定されている希少種で、東京都内の生息地はほんの数箇所しかありません。ここの土は良い、そう確信しました。実際に分けていただいたのはその水田の隣接地で、30年前まで水田だった場所の土地です。近年の研究により、水草の種子の寿命は40年程度であることがわかってきているので、水草の発芽が十分に期待できます。

**多様な水辺環境の創出**

水辺に生息する動植物の種類は多様で、種類によって好む環境が異なります。池の中に多くの環境パターンを再現できれば、それだけ多くの種類の生きものを誘致できることとなります。

1つのポイントは水の流れの有

無です。池の中には滝を設け、ポンプで汲み上げた水を循環させているので、流水環境と止水環境の両方があります。また、龍神池の深さは一様ではありません。極めて浅い場所(水深1〜5cm)、やや浅い場所(水深15cmほど)、深い場所(水深30〜40cmほど)の3つに分けられています。深さの違いに応じて異なる種類の水草を発芽・生育させることを狙っています。

**今後の展開**

とりあえずピオトープ池は出来上がりましたが、楽しみなのは来年の春以降です。どのような水草が発芽し、どのような生物がやってくるのか、期待が高まります。

また、周辺地域へのピオトープの普及も進めていきたいと考えています。ピオトープは、それ1つでも有用なものです。2箇所3箇所と数が増えて連続性ができると、地域全体の生物多様性の質も上がっていきます。これをピオトープ・ネットワークといいたいです。田無神社に龍神池が作られたことをきっかけに、周辺の小中学校、企業の敷地、個人の庭先などにもピオトープが作られ、ネットワークが広がっていくよう、みんな

なで盛り上げていきましょう！

**【東京杉並で再発見された奇跡のメダカ】**

龍神池のメダカ(ミナミメダカ)は、杉並区にお住いの生物研究家 須田真一先生から譲り受けたものです。

このメダカは、須田先生のお父上である須田孫七先生が第二次世界大戦下の1944〜45年に杉並区の井草川で採集したものです。当時、空襲火災に備えて各所に設けられた防空水槽に蚊が大発生し、人々を悩ませていました。そこで、蚊の幼虫であるボウフラを食べさせて駆除するためにメダカの採集が行われ、井の頭自然文化園で繁殖させて近隣へ配布されました。戦争が終わり、メダカは必要なくなつたのですが、須田孫七先生とその後70年間以上にわたりそのメダカを飼育し続けました。

2007年、都の研究機関によるDNA検査により、他地域のメダカやヒメダカと交雑していない貴重な東京在来の純系メダカであることが判明し、大きな話題になりました。

田無神社では、このたいへん貴重なメダカを譲り受け、龍神池で

遣伝子保存の一助として飼育することになりました。この貴重なメダカを皆さんの手で守っていきましょう。



工事の様子



池の様子(完成前)